

我がきょうだい

浮べぬ運命

甲「先生、生きることが味気なくてたまりません。もつとはつきり生き甲斐のある生活がしたいものであります。どうすればいいのでしょうか。」

乙「それはいろいろな原因もありましようが、根本はお念仏がはつきりしないのでしよう。」

甲「私もそうだと思いますが、しかし、私は私の生きてゆく彼方に希望がないのです。私はふたたび浮ばれそうにもない重い荷物の下敷になっていきますから。」

乙「ご同情します、たしかにあなたは気の毒なお方です。お父様が残した借金だけでも、あなたの一生は暗いものになりますからね。」

甲「子どももありますし、考えて見るといやになります。一生涯かかっても浮べるかどうかかわらないのですから。」

乙「一度に始末をつけて落ちてしまえといつてもそれもできないご事情ですしね。」

若き日

乙「そこで、私はあなたにはつきりと語らなければならぬ。私たちは次のことをまずはずはつきりしましょう。いったい、人生の真の勝利は何であるかということ。私どもは、どうしても、どうしても真の意味で、人生の真の勝利者にならなければなりません。私たちの同胞、それはたいがい幸福な人たちではない。まことに不幸な人が多いのです。それらの人たちの中には、昔は泣いていた人が、今は喜んで苦しんでいるのが多いのです。そして退転することなく歩みきっています。」

甲「私もそうなりたいのです。どうすればならぬでしょうか。」

乙「まず、人生の真の勝利は何であるか、から問題にしてかかりましょう。私どもは『幸福』にあると考えやすい。いな、徹頭徹尾そう信じています。おそらくそれは本能の声であります。しかるに人生の現実はその裏切ります。私も完全に裏切られていますし、あなたもまた失っています。私は二十歳前後は、まるでこの問題のために悩まされました。そして今日まで幸福らしいものは恵まれてきませんでした。そこで幸福の内容を分析して見ましょう。

- (1) 安らかなる眠りと、
- (2) 美味なる食物と、
- (3) 豊かなる富と、
- (4) 輝く名誉、高き地位、社会的賞賛、あるいは尊敬、
- (5) 美しき異性、

以上の五つの中で何かかなりそろった人がいわゆる成功者であります。これは仏が示した人間の欲の内容ですが、人間はだれもかれもこの五つの幸福を勝ち得ようと人生途上に出発します。

若き日、いかに美しい憧憬となり希望となって輝くことでしょう。人生の実相を知った今日、この五つの幸福を追うて、まるで選手たちのように走る若い人を見る

と、たまたまなくなりません。その大半はやがて灰色な顔になるのですから。私は二十歳前後になった時、私の地上における運命、足についている重い鎖を凝視して、毎日を泣きました。運命に反抗して周囲を泣かすには、あまりに弱い私でありました。しかもあきらめてしまうにはあまりに強い力があります。人間がよく自殺するのはそうした時ではありませんまいか。」

甲「先生は、私のことを語っているではありませんか。」

乙「しかし、そうした宿業は、私の眼を内に転じさせました。それから幾年かの悶えがありました。もし、その時、幸福への欲をぶつり捨てるなら、自暴自棄になつて世をすねて渡るようになるか、悪魔になつて暗い人生をたどるかでありました。私にはそれもできませんでした。」

釈尊のもたえ

乙「そのうちに仏さまが私を捕えました。仏教に入つて第一に驚いたことは、仏教の根本者である釈尊が、やはり人生について悩みはしましたが、私どもの悩みとはその出發が違つていたこととあります。釈尊は、五欲を追うている人間のはかなき運命をみつめて、幸福そのものを捨てて、まったく別なものを求めるために悩まれました。彼にとつては、人間が幸福と考えているものは苦でしかなかった。迷いでしかなかったのです。宮殿も、富も、王者の地位も、妃も、愛子も、けつして幸福ではなかつたのです。ただ、願わしかつたのは、真のわれの發見、真我の成就であつたのです。そこで、乞食にまで下りて、そこから一切を見かえたのです。そしてそのどん底に、真裸の上に、仏陀の自覚を成就したのです。このことはあなたもまたはつきり受け取つて考え直して見なくてはならないことです。」

甲「まことにそうですね。」

親鸞聖人

乙「幸福を求めて泣くのと、幸福を幻と観じて泣くのと、天地雲泥の差ですから、少なくともわれらの生活の目標にまちがいのあることだけは明らかです。そして、立場は違いますが、親鸞聖人のご一生もまた幸福とはおよそ縁の遠いものでした。しかも聖人は真の意味では人生に勝つた人です。悲痛な勝利者です。」

甲「しかし聖人は日本六聖者の一人になられました。」

乙「それは聖人はご存知ないことです。後世になつてそうなつたので、聖人は現在これを見られたら何とお言いになるかわかりません。聖人は『名利の大山に迷惑して』と悲歎してはいられませんが、しかし、きれいにそれを超えて歩んでいられます。むしろ地に埋もれておしまいになろうとせられました。そこには、後世になつて有名になるといつたようなものは微塵も動いてはいませんでした。まったく忠実に内面的な歩みを続けられたのです。私どもは聖人を慈父と仰ぎます。まことに聖人のお弟子でありたい、子でありたいと思ひます。それだけで満足のできる心がお念仏の中に見えてきます。」

『法華にいわく、善知識とはこれ大因縁なりと。また阿難のいわく、善知識とはこれ半の因縁なりと、仏のたまわく、しからず、これ全き因縁なりと』(往生要集とありますが、善知識を得た時、初めて私どもの世界は大きに転回してきます。聖人は私どもの善知識です。善知識とは、私と内的運命を一つにする人です。同じ魂に生きる人です。)

甲「私には今日までそれがなかったのですね。」

乙「善知識がない人は、つきつめて人生を凝視した時、まったく孤独なはずでありま
す。私は、聖人を憶う時、どんな時にも、心の広がりや平和を感じるようになりま
した。」

甲「それでは先生は幸福は求められませんか。」

わが兄弟

乙「それはあります。ありますが、しかし別の魂が動いて来ます。それは聖人によつて如来の心を知らされたからであります。私には多くの同胞があります。たいがいは幸福からつきはなされた人たちですが、そうした人の一人でもが、もし私の存在するために、生きることがうれしくなるとか、力強くなるとか、明るくなるとか、ましてや、ともにみ仏を聞き、お念仏してくださる方を見つけた時に、ただの一人であろうが、そこに私の生きていることにうれしさを感ずるようになりました。私の真意を聞いて、共にみ仏を生きてくださる方は、社会の底に黙して、今までと違った歩み方をはじめてくださるのです。」

甲「私どもはあまりに結果主義的になろうとしますね。そして人に知られようとあせつて。」

乙「そうです。自分の田の水を見て歩く時、そつと人の田にも水が干ておればあてておく。穴があればふさいでおく。それをちつとも人に知ってもらわなくてもいいのです。けれども、名を挙げたいのですね。この人間のつまらぬ心が、つまらぬとわかつたほどでも、だいぶん楽になります。あなたにしたところが、あなたの力で一切の借金を支払って、やがて富をつくつて、その次と、幻を追うているから苦しみが倍になるらしいのです。私どもが『おい兄弟』と手をさしのべるあなたは、そんなあなたでなしに、今その宿命の岩壁にぶちあたつて、そこに今日一日を成就してゆく、今のあなたです。合掌して念仏道をその中に成就しようではありませんか。もしあなたがその忍従の一道を歩みはじめると、必ずあなたの周囲にはあなたによって力づけられる人ができましょう。」

甲「どうやら違った世界が開けてくるようです。これから歩みきります。ありがとうございます。」